いろふく

まごころ銘茶　狭山園だより

令和６年10月

れがーー

狭山茶の伝承　埼玉県入間市

明治８年（１８７５）外商を介在しない、日本人だけで運営する直輸出会社『製茶輸出会社』が武蔵国入間郡黒須村（現、入間市宮前町）に誕生した。直輸出会社としては日本初で、株券を発行した埼玉県最初の会社でもある。

●

安政６年（１８５９）に函館、横浜、長崎が開港すると、翌年より茶の輸出が始まる。京都や静岡などの主だった茶産地より港が近く、運搬手段も整っていたのが埼玉、東京圏だった。当時この地域の茶は、八王子の仲買商が集め、馬、荷車、船を使って横浜の外人居留地外商へと運ばれた。しかし輸出に関しての知識や情報は全くなく、八王子に集められた茶はその段階で粗悪な茶と混ぜられ、手間暇かけて製茶しても安値で買いたたかれた。製茶業者にとっては不利益な取引が続いた。横浜居留地でも途中いくつも入る中間業者が輸出をさらに困難なものにしていった。

明治７年、明治政府は生糸に次ぐ重要な輸出品であった茶の振興に着手し、茶の直輸出を奨励した。こうした動きを期に狭山でも一気に直輸出の機運が高まってくる。明治８年黒須村の豪農商だった繁田武平満義は県域の製茶業者とともに狭山茶を輸出する『狭山製茶会社』を設立し社長に就任した。

加治丘陵桜山展望台からの眺望

この会社の目的は、①居留地の外商を介さず公正な収益を上げること。②品質劣化や異物混入、着色などの粗悪品製造の防止。③農家に茶園整備費用や製造資金を貸し出して茶業振興を図るということだった。直輸出はニューヨークで商社を経営する佐藤桃太郎をエージェントとして始まった。これを契機に『八王子茶』、『根通り茶』などと呼ばれていた茶名が『狭山茶』に統一される。

しかし一口１００円（今の１００万円程）の出資金は思うように集まらず、当初１５，０００円の予定がその三分の一という前途多難な資金繰りでの開業だった。その上直輸出の実態は製茶出荷後、再生、荷造りに１ヶ月、横浜からサンフランシスコを経由してニューヨークまで２ヶ月、販売に３ヶ月、代金回収に３ヶ月、計９ヶ月を要した。さらに製茶を１貫目（３・７５kg）２円60銭で買い上げ、ニューヨークまでの諸経費１円。それに２円の利益を乗せての販売は米国の市場価格と比べても高価だったため売れ行きも順調ではなかった。横浜正金銀行の外国為替が始まるのは明治15年からで資金繰りはさらに悪化した。電信は始まっていたが、まだコストが高かったため郵便で入る北米情報は遅く、ビジネスチャンスも活かしきれなかった。追い打ちをかけるようにエージェントの佐藤桃太郎の会社が明治12年に経営破綻することで第１期営業期間は５年間で終了した。

翌明治13年、『狭山製茶会社』は体制を立て直すために、株券の金額一口１００円を50円として出資の調達先を広げ、増資して始まった。横浜に支店を開設し外商を介しての直輸出となる。外商を介さず日本人だけでという理念はやむなく後退した。経営方針を大きく変えての始まりだったが、営業は好転せず、明治16年には事実上終焉することになる。明治８年に開業し、わずか８年あまりで日本の直輸出の草分けである『狭山製茶会社』は幕を閉じた。

●

その後入間市域にはいくつもの茶輸出会社が設立され、輸出の増大を図るための組合の結成や栽培、製茶技術の向上のために伝習所の設置などが行われた。日本茶のアメリカへの輸出量は明治24年にピークを迎えるが、価格は下落し続けていた。アメリカでは独立戦争の転機にもなったといわれる１７７３年の『ボストン茶会事件』を境に嗜好の主流はコーヒー、紅茶へと変わっていき、１８８０年代に入るとインド、セイロンの紅茶が薄利多売を武器に瞬く間に市場を席巻していく。機械化が遅れた日本茶はこれに対抗することができなかった。さらに中国から入る粗悪な茶に対し明治15年『不正茶輸入禁止令』が発令され、日本茶もこのあおりを受けてしまうことになる。大正時代に入ると、お茶の輸出量はピーク時の４分の１に激減するが、それに代わるように国内の消費が伸びていった。開国時に輸出向けとして始まった煎茶の生産が、昭和に入って内需製茶業経営に代わっていった。

狭山製茶会社がアメリカで販売した茶のラベル（入間市博物館蔵・石版刷り蘭字）中央下段には、Ｍ　ＳＡＴＯ（ニューヨークエージェント・佐藤桃太郎））の名前。

元学芸員　工藤宏さん

長年、狭山茶の歴史文化を研究する『入間市博物館』の元学芸員、工藤宏さん（70歳）は「この狭山製茶会社を作った経営陣は日本の近代歴史の中でも注目される人たちで、海外に果敢に挑戦していった原動力が、その後の狭山茶の自園、自製、自販という独自の形態を作り上げ、『味の狭山茶、日本三大銘茶』の地位におしあげたのではないでしょうか」と話す。

金子台地の北にある加治丘陵桜山展望台に上ってみた。南遠方には狭山丘陵が見える。この二つの丘陵のふもとの村々の人がかつて世界を目指して必死に茶作りをしていた。今、過去から引き継いだものをこれからどうやって未来へ引き継いでいくのだろうか、期待して見ていきたい。